

○適正な施肥と適期中干しの実施による籾数過剰の防止
○品種に応じた播種時期の適正化と適期田植

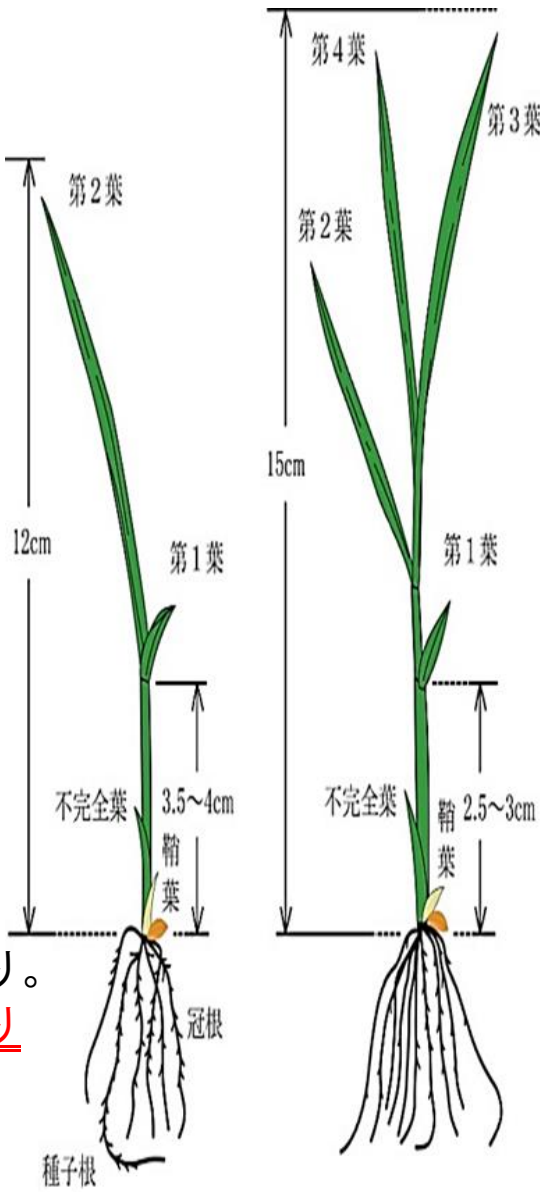
1 育苗作業計画 ～規格苗で計画的に移植作業をする！～

- 高温登熟を回避するためコシヒカリの移植は5月10日以降とするが、つきあかり等の早生品種は生育量を確保のため、できるだけ早植えとする。
- 葉齢は、稚苗2.0葉、中苗3.5葉がめやす(図1)。
- 育苗期間のめやすは、稚苗(加温出芽ハウス育苗)で18日程度、中苗は30日程度、(加温出芽露地プール育苗)で20～23日程度とする。は種が早くなりすぎないように注意する。
- は種時期が早く、育苗日数が長くなると老化苗となり初期生育不良、生育の後ずれ、茎数不足による収量低下につながるため注意する。

2 土づくり資材の積極的な活用

(1) リン酸・ケイ酸の補給が土づくりの第一歩

- 年々不足するリン酸・ケイ酸の補給で、気象変動に対応できる足腰の強い稲作り。
- 毎年不足していると言われるケイ酸を、稲わら・籾殻の秋すき込みと、土づくり資材の活用で補給する。(約30～40kg/10a)
- 黒ぼく地帯を中心に、可給態リン酸が不足している。必要に応じて補給する。



【図1】 規格苗(左：稚苗、右：中苗)

(2) 施肥設計

基肥は良質茎の早期確保のために重要。しかし、施用量が多すぎると過剰生育となるため、前年に過剰生育となったほ場や倒伏したほ場では減肥する。それぞれのほ場の地力や作付品種に合わせて施肥量を設計することが重要。
リン酸・加里の少ない肥料を使用する場合は、事前に土壌診断を行い、リン酸・加里が不足していないことを確認する。

[コシヒカリ基肥量の目安(平坦・中山間地)(kg/10a)]

成分 土性	窒素	リン酸	加里
粘土質	2～3	5	4
砂質	3～4	6	6
黒ボク	5	8	7

[こしいぶき基肥量のめやす(kg/10a)](分施) ※カッコ内は中山間地の値

成分 土性	窒素	リン酸	加里
粘土質	3	7(4)	6(3)
砂質	4	8(5)	6(4)
黒ボク	(5)	(8)	(7)

3 緑化期から田植までの管理

(1) 硬化期

育苗様式	管理ポイント(温度・水管理等)
稚苗ハウス	(1) 温度管理： <u>日中15～20℃、夜間10～15℃</u> (2) 硬化期前半・午前中早めにハウスの換気を始め、夕方には閉める。 ・かん水は朝に十分行い、原則夕方は行わない。(床土が乾いた場合のみかん水する) (3) 硬化期後半・田植え5～7日前からは夜間もハウスを開放する。(8℃以下になる異常低温時は除く)
露地プール	(1) 露地プール育苗では低温による出芽遅延や苗揃い不良の懸念があるため、除覆前は保温に努める。 また、降雨後は酸欠とならないよう、被覆の上やプール内にたまった余分な水を排除する。 (2) <u>除覆、湛水後は苗が伸長しやすいので水温の上昇に注意し、必要に応じて水の更新を行う。</u> (3) 霜注意報等、異常低温が予想される時は速やかに床土より上まで湛水。 (4) 育苗箱を軽くするため移植2～4日前から落水。

※裏面へ

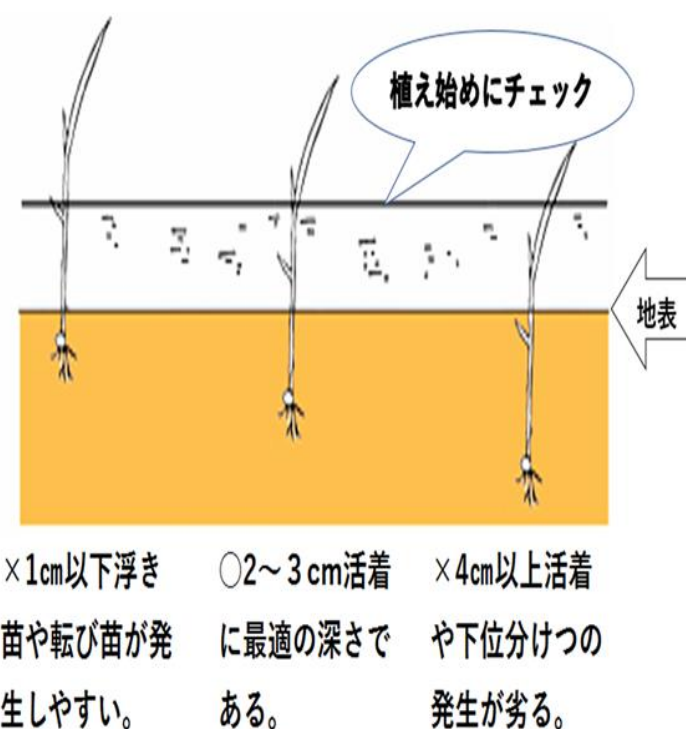
(2) 移植前追肥(べんとう肥)の施用

- ①施用時期は移植4～5日前(1.8葉期)が基本。苗の老化防止と移植後の活着を早める効果がある。
- ②窒素成分で1箱当たり1～2gとなるよう、肥料を箱の上から散布する。散布後は十分散水して肥料ヤケを防ぐ。(例:くみあい液肥10mlを100倍液で1,000ml/箱・べんとう肥20g/箱)
- ③プール育苗の場合は箱の上まで水を張り、施用後は2日間程度落水しない。
- ④軟弱・徒長苗の場合は、障害発生の可能性があるため追肥を控える。

(3) 移植時の留意点と移植後の水管理

【移植作業の良否は、活着・初期生育に影響を及ぼすので、下記の事項に留意する。】

- ①植込苗数は1株当たり3～4本とし、過繁茂や細莖化を防止する。
- ②適正植付深度「2～3cm」であるか確認する。
- ③田植機の移植速度が高速になるほど浮き苗や転び苗等が発生しやすくなるので、適正速度で移植作業を実施する。
- ④活着するまでは3～4cmのやや深水とし、保温的水管理で低温や強風による植傷みを回避する。
- ⑤活着後は2～3cmの浅水管理とし、水温の上昇を図り分けつの早期発生を促す。
- ⑥ワキの発生(水田に足を踏み込むと盛んに気泡を発生する)が多い場合は夜間落水を行い、根の健全化を図る。



注) 一発元肥肥料等を使用する場合は、被覆資材のプラスチック殻がほ場から河川等に流出しないよう代かきは浅水で行い、田植え前は強制落水せず自然落水で水位調節する。

4 除草剤使用の留意点

(1) 散布時の留意点

- ・ 散布前に必ず使用上の注意事項をよく読んでから散布する。
- ・ 植え傷みにより活着が遅れている場合は、イネの生育回復を待ってから散布する。
- ・ 異常低温又は異常高温時や強風時は、薬害の発生や飛散の恐れがあるので除草剤の散布は行わない。

(2) 初期除草剤の使用は移植時または移植後が基本だが、代かきから移植まで長い期間が空く場合は移植前に使用する。ただし、散布は移植7日前までに終了する。

(3) 移植後使用除草剤の効果を高めるため、散布後4～5日間は除草剤の種類に応じた水深を確保する。また、散布後7日間は止水し、落水やかけ流しはしない。

5 中干し・溝切りの実施

- (1) 中干し・溝切りは重要な生育調整。穂肥が確実に施用できる適正生育量の確保の為、適正に実施する。
- (2) 実施時期は田植後25日をめやすに生育を確認し、遅れないよう中干しを開始する。

★目標莖数 50株植え18本/株・60株植え16本/株の莖数を確保したら落水し、中干しを開始する。

※次号に、中干し指導会の開催会場計画を掲載する予定。

○適正な施肥と適期中干しの実施による籾数過剰の防止
○品種に応じた播種時期の適正化と適期田植

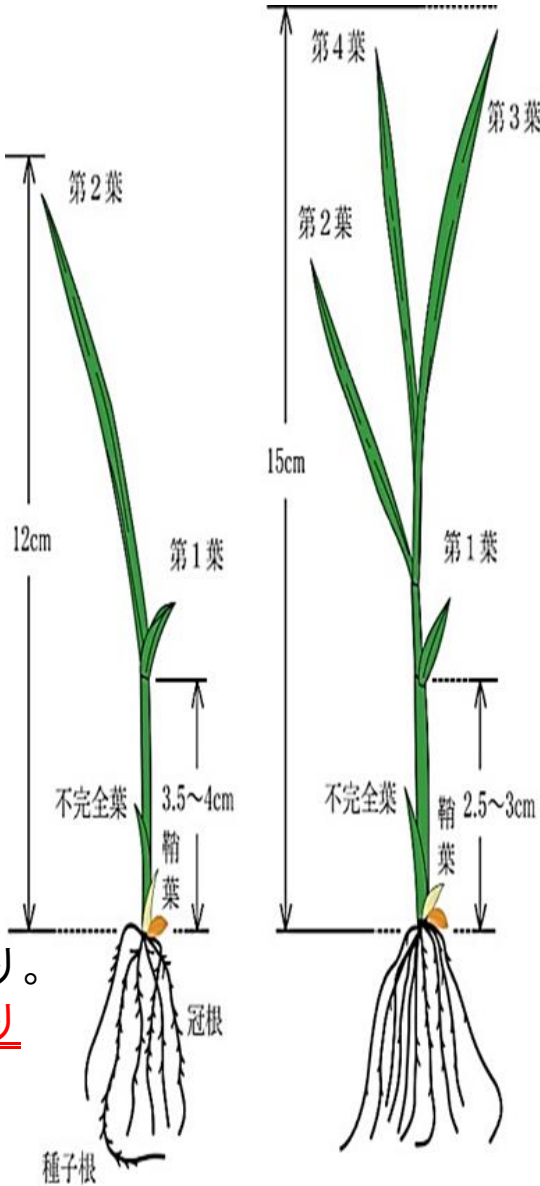
1 育苗作業計画 ～規格苗で計画的に移植作業をする！～

- 高温登熟を回避するためコシヒカリの移植は5月10日以降とするが、つきあかり等の早生品種は生育量を確保のため、できるだけ早植えとする。
- 葉齢は、稚苗2.0葉、中苗3.5葉がめやす(図1)。
- 育苗期間のめやすは、稚苗(加温出芽ハウス育苗)で18日程度、中苗は30日程度、(加温出芽露地プール育苗)で20～23日程度とする。は種が早くなりすぎないように注意する。
- は種時期が早く、育苗日数が長くなると老化苗となり初期生育不良、生育の後ずれ、茎数不足による収量低下につながるため注意する。

2 土づくり資材の積極的な活用

(1) リン酸・ケイ酸の補給が土づくりの第一歩

- 年々不足するリン酸・ケイ酸の補給で、気象変動に対応できる足腰の強い稲作り。
- 毎年不足していると言われるケイ酸を、稲わら・籾殻の秋すき込みと、土づくり資材の活用で補給する。(約30～40kg/10a)
- 黒ぼく地帯を中心に、可給態リン酸が不足している。必要に応じて補給する。



【図1】 規格苗(左：稚苗、右：中苗)

(2) 施肥設計

基肥は良質茎の早期確保のために重要。しかし、施用量が多すぎると過剰生育となるため、前年に過剰生育となったほ場や倒伏したほ場では減肥する。それぞれのほ場の地力や作付品種に合わせて施肥量を設計することが重要。
リン酸・加里の少ない肥料を使用する場合は、事前に土壌診断を行い、リン酸・加里が不足していないことを確認する。

[コシヒカリ基肥量の目安(平坦・中山間地)(kg/10a)]

成分 土性	窒素	リン酸	加里
粘土質	2～3	5	4
砂質	3～4	6	6
黒ボク	5	8	7

[こしいぶき基肥量のめやす(kg/10a)](分施) ※カッコ内は中山間地の値

成分 土性	窒素	リン酸	加里
粘土質	3	7(4)	6(3)
砂質	4	8(5)	6(4)
黒ボク	(5)	(8)	(7)

3 緑化期から田植までの管理

(1) 硬化期

育苗様式	管理ポイント(温度・水管理等)
稚苗ハウス	(1) 温度管理： <u>日中15～20℃、夜間10～15℃</u> (2) 硬化期前半・午前中早めにハウスの換気を始め、夕方には閉める。 ・かん水は朝に十分行い、原則夕方は行わない。(床土が乾いた場合のみかん水する) (3) 硬化期後半・田植え5～7日前からは夜間もハウスを開放する。(8℃以下になる異常低温時は除く)
露地プール	(1) 露地プール育苗では低温による出芽遅延や苗揃い不良の懸念があるため、除覆前は保温に努める。 また、降雨後は酸欠とならないよう、被覆の上やプール内にたまった余分な水を排除する。 (2) <u>除覆、湛水後は苗が伸長しやすいので水温の上昇に注意し、必要に応じて水の更新を行う。</u> (3) 霜注意報等、異常低温が予想される時は速やかに床土より上まで湛水。 (4) 育苗箱を軽くするため移植2～4日前から落水。